

## 青年期の強迫パーソナリティ傾向について ーヴァン・ジョインズの交流分析による人格適応論の視点からー

西田みどり（新潟青陵大学キャンパスライフサポート室）

村松公美子（新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科）

キーワード：強迫パーソナリティ傾向、OPTS、JPAQ

### About an obsessive personality trait of the youth from the viewpoint of the personality adaptation theory by the interchange analysis of - Vann Joines -

Midori NISHIDA (Campus Life Support Room of Niigata Seiryō University)

Kumiko MURAMATSU (Graduate School of Niigata Seiryō University)

Key words : obsessive personality trait, OPTS, JPAQ

#### I. はじめに

強迫 (Obsession) の性格特徴としては、几帳面、完全主義、知性重視が挙げられる。これは、健常者の中にも見出すことができ、不安に対処するために取られる防衛といえる。そして、この強迫は現代社会において求められているものでもあり、時と場合によっては生活の中で非常に積極的・生産的役割を演じる防衛でもある<sup>9)</sup>。強迫が中核をなす精神疾患には強迫パーソナリティ障害や強迫性障害があり、不安障害やうつ病などのほかの精神疾患との併存も見られる。

中でも、青年期は「特に強迫的な心性が活発化する時期」とされている<sup>3)</sup>。この時期は「第二の分離・個体化期」<sup>13)</sup>でもあり、この時期になると、これまで絶対的であった価値観に揺るぎが見られ、大人たちの言動一つひとつに苛立ちを覚え、反社会的な行動や青年期特有の言動が現れる。身体的・心理的・社会的にも変化が強いられ、自己の内的な衝動や欲求に対するコントロールの効かなさに不安を感じ、強迫的防衛機制を多用すると考えられる。青年期には多くの発達課題とそれに伴う葛藤を経験し、場合によっては過剰適応や引きこもり、リストカットといった様々な不適応状態・精神疾患の発症に至ることもある。そして、不適応状態や障害を持つ人々の多くは強迫パーソナリティを持つ可能性も高いとも

報告されており<sup>1)</sup>、力動的精神医学における強迫は実に様々な形で見出されている。また、成田<sup>7)</sup>は臨床経験から、昨今の青年期患者の特徴の一つに古典的強迫性格と異なる広義の強迫パーソナリティとして「弱力型強迫性格」を挙げている。

これまでの強迫パーソナリティの先行研究の多くが、強迫性障害の行動・認知的な面から作成された評価尺度を用いた研究である<sup>2) 14)</sup>。しかし、強迫パーソナリティは強迫性障害の必要条件ではないという見解が有力であり、DSM-Ⅲから本質的には同じ強迫に関する障害の異型として、強迫性障害は区別されている<sup>4)</sup>。そして現在、強迫パーソナリティの評価尺度の作成・研究がおこなわれつつある<sup>6) 10) 11)</sup>が、大きな概念である強迫パーソナリティを包括したものとは言い難く、また、古典的な強迫性格とは異なる発現様式を実証的に検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究は、DSM-Ⅲ-RおよびDSM-Ⅳ-TRの強迫パーソナリティの診断基準を基盤に強迫パーソナリティ傾向をアセスメントし、精神分析的視点として、ヴァン・ジョインズの交流分析による人格適応論における適応タイプとの関連を見出すことによって、青年期における強迫パーソナリティの発現様式の実証的検討を試みた。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象者と実施方法

高等学校の3年生235名（平均年齢17.38歳、SD=0.51、男性112名、女性83名、無記名40名）を対象に、質問票調査を実施した。そのうち、回答に不備のある者を除いた198名を分析対象とした（有効回答率84.3%）。

### 2. 実施内容

#### 1) Obsessive Personality Trait Scale (OPTS)

村松<sup>5)</sup>がDSM-Ⅲ-Rの強迫性人格障害の記述に準じて作成したObsessive Personality Trait Scale（以下、OPTS）を用いた。これは強迫性格特性の強度を示す尺度であり、5件法で回答する。

#### 2) ジョインズ人格適応型心理検査 (JPAQ) 日本語版第3版 (2012)

交流分析による人格適応論から、Joines, V.<sup>12)</sup>が6つ人格適応タイプを基盤に作成した質問紙で2件法を用いている。6つの適応タイプはそれぞれ12項目で測定・グラフ化が可能であり、各適応タイプ傾向を全体的に把握できる。人格適応タイプは①スキゾイドタイプ（以下、CD）②反社会タイプ（CM）③パラノイドタイプ（BS）④受動攻撃タイプ（PR）⑤強迫観念タイプ（RW）⑥演技タイプ（EO）が挙げられ、それぞれの適応タイプには自我状態モデルが示されている。

### 3. 分析方法

データ解析は、統計ソフトSPSS (ver.14.0) を用いて行った。OPTSとJPAQの各項目の関連を調べるため、Spearmanの相関係数を求めた。次にOPTS得点を従属変数とし、相関があったJPAQの各項目を独立変数として重回帰分析を行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 記述統計と正規性の検討

JPAQの原尺度で規定されている12項目の合計を各適応タイプの程度として、OPTSは合計得点を算出し、Shapiro-Wilk検定を行った。結果、OPTSの合計得点には、有意な正規性が認められた。JPAQの6適応タイプは、有意な正規性は認められなかったが、ヒストグラムは、正規分布に近似しており、著しく

逸脱した外れ値はなかった。

### 2. JPAQの各適応タイプとOPTSとの相関

正規性が認められなかったため、Spearmanの相関係数を求めた（表1）。結果、OPTSに対しては、それぞれCD ( $r_s = .322$ ,  $p < .0001$ )、BS ( $r_s = .279$ ,  $p < .0001$ )、PR ( $r_s = .386$ ,  $p < .0001$ )、RW ( $r_s = .224$ ,  $p = .002$ ) との間に弱い正の相関を示した。CM ( $r_s = -.002$ ,  $p = .974$ ) とEO ( $r_s = .010$ ,  $p = .885$ ) についてはOPTSとの相関は見られなかった。

表1：JPAQの各人格適応タイプとOPTSとの相関係数 ( $r_s$ )

	OPTS合計	
	相関 $r_s$	p
CD合計	0.322	<.0001
CM合計	-0.002	.974
BS合計	0.279	<.0001
PR合計	0.386	<.0001
RW合計	0.224	.002
EO合計	0.010	.885

### 3. 相関が見られたJPAQの適応タイプとOPTSとの重回帰分析

OPTSを従属変数、相関傾向が認められた各適応タイプの合計得点（PR、CD、BS、RW）と性別を独立変数として、重回帰分析を行った（表2、図1）。

その結果、このモデルのANOVAは有意性 ( $P < .0001$ ) があり、 $R^2$ は、0.252で有意であった ( $P < .0001$ )。Durbin-Watson比は1.886であり、このモデルの適応度はあった。また、各説明変数の許容度は0.2以上、VIFは4以下であり、多重共線性は認められなかった。

標準偏回帰係数 $\beta$ については弱い、正の有意な値を示した（PR： $\beta = 0.289$ ,  $p < .0001$ , CD： $\beta = 0.218$ ,  $p < .0001$ , BS： $\beta = 0.149$ ,  $p < .01$ ）。しかし、性別とRW

表2：PR,CD,BS,RWとOPTSの関連

説明変数群	OPTS総得点	
	$\beta$	p
性別	-0.020	.773
PR合計	0.289	<.0001
CD合計	0.218	<.0001
BS合計	0.149	.009
RW合計	0.062	.394
$R^2$	0.232	<.0001

ANOVA:  $p < 0.0001$ ; Durbin-Watson = 1.886

については有意な関係を認めなかった（性別： $\beta = -0.020, p < .773$ , RW： $\beta = 0.062, p < .394$ ）。

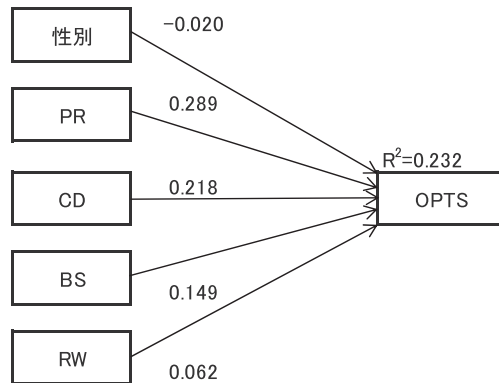


図1：性別、PR、CD、BS、RWとOPTSのパス図

#### IV. 考察

強迫パーソナリティ傾向を従属変数とし、JPAQの相関が見られた適応傾向を説明変数として重回帰分析を行った結果、PR、CD、BSが強迫パーソナリティ傾向に有意に影響を与えていた。しかしRWは強迫パーソナリティ傾向とごく弱い相関は認められたものの、OPTSに有意な影響を与えてはいなかった。つまり、高校生における強迫パーソナリティ傾向が高い人はRWの適応傾向ではなく、PR、CD、BSの適応傾向として現れている可能性が示唆された。

#### 1) 交流分析による人格適応論について<sup>12)</sup>

人格適応論の6つの適応タイプのうち、はじめの3つは『生き延びるための適応』、後半の3つは『行動上の適応』という（表3）。『生き延びるための適応』は最初の心理社会的課題「基本的信頼 対 基本的不信（口唇期）」のものとされている。この適応は信頼が壊れる場合、すなわち、子供が親や周りの環境を彼らの欲求に応じてくれるものと信頼出来ない場合に、自分の力で自分の世話が出来る最良の方法について、子供が選択した反応とされる。OPTSと関連があったCDとBSが当てはまる。CDの典型的な行動様式は、引きこもって、ことが収まるのを待つ傾向があり、他者に迷惑をかけないことに多くのエネルギーを費やす。BSの典型的な行動様式は、まずは慎重状況について考え、そして確実に自分の手の内でことを進めていくように動く傾向があり、多くのエネルギーを費やして用心する性格である。

『行動上の適応』は、2番目「自律性 対 恥と疑惑（肛門期）」、3番目「積極性 対 罪悪感（エディプス期）」のものとされている。この適応は、家庭と外界において、親が適切な行動を強要したり、行動について期待するのに応えようとする反応とされている。OPTSと関連があったPR、RWが当てはまる。PRの典型的な行動様式は自分のやり方で出来るように、他者の人の期待に対して常に争うという傾向があり、他者を出し抜くために多くのエネルギーを費やす。RWの典型的な行動様式は、全てを正しく、そ

表3：人格適応論における6つのパーソナリティモデルの概略（文献12、34～35一部修正）

	適応タイプ	性格特徴	性格描写
生き延びるための適応	スキゾイドタイプ (CD) : 創造的夢想家	受動的引きこもり、回避、分離、芸術性、他者への配慮	恥ずかしがり、感受性が強い、風変わり、支持的、親切
	反社会タイプ (CM) : 魅力的操作者	社会規範との闘争、葛藤への低い耐性、興奮を求める、目的志向	自分本位、魅力的、無責任、衝動的、攻撃的、口が達者、操作的
	パラノイドタイプ (BS) : 才気ある懷疑者	硬直した思考、誇大化、投影、明晰な思考、強い警戒心、詳細にこだわる	超感受性、疑い深い、羨む、博識、注意深い
行動上の適応	受動攻撃タイプ (PR) : おどけた反抗者	受動的攻撃性、過剰な依存性、自己中心に考える、白か黒かにこだわる	妨害する、頑固、忠実、エネルギーが豊富、粘り強い
	強迫観念タイプ (RW) : 責任感ある仕事中毒者	順応性、良心的、責任感、信頼性	完全主義、超抑圧的、義務感、リラックスが苦手、頼れる
	演技タイプ (EO) : 熱狂的過剰反応者	過剰反応、感情不安定、注目されたい、誘惑的人の感情を気にする	未成熟、自己中心、自惚れ、依存的、遊び上手、魅惑的

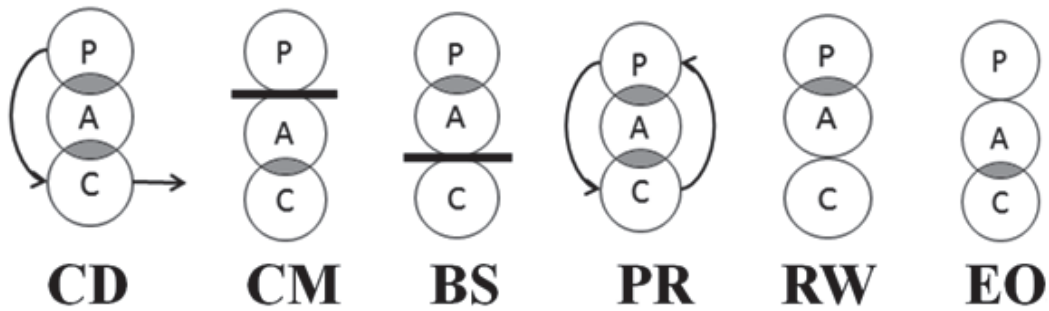


図2：各適応タイプの自我状態モデル（文献12、47～55の一部を抜粋）

してうまくいくように、ベストを尽くそうとするという傾向があり、物事をよく行うことに多くのエネルギーを費やす性格とされている。

また、人格適応論では各適応タイプの自我状態モデルが示されている（図2）。

**親（以下、P）**は、子どもの時に無条件に自分の両親を模倣し、取り入れた思考・感情・行動であり、**子ども（C）**は、子どもの時に発達した自分の部分を使った思考や感情や行動の組み合わせで、自我状態の一番元となる原型である。そして、**成人（A）**は＜今・ここ＞の状況に対する反応として、両親や親的役割の人からコピーしたものでも、子ども時代の再現でもないものをいう。**汚染（グレー）**はPまたはCの内容の一部をその個人がAの内容であると間違えることである。Pからの汚染は偏見の正当化、Cからの汚染は妄想の合理化として現れる。そして、汚染の程度が増すと**除外（一）**が生じると考えられている。

## 2) 古典的強迫性格と現在の強迫パーソナリティ傾向の違いについて

今回、RWと強迫パーソナリティ傾向に、弱い相関傾向は見られたものの、重回帰分析においては、OPTSでアセスメントされる強迫パーソナリティ傾向への有意な影響は認められなかった。

RWは責任感ある仕事中毒者とも言われ、模範的・物事を良く行う人物である。RWの高い人は、すべてのことを正確にやるという点に価値を置いている。この見解は、古典的強迫性格と一致するものと考えられる。しかし今回の結果では、高校生における強迫パーソナリティ傾向には影響していなかった。このことから、昨今の青年期における強迫パーソナリティ傾向は古典的強迫性格とは異なる様相が示唆された。高校生は人格形成のため試行錯誤している時期である。そのため、強迫パーソナリティ障害の特徴である仕事や活動を完全に達成しようと観念的に

とらわれる傾向は成人期以降に比して弱い可能性が示唆された。

## 3) 青年期の強迫パーソナリティ傾向について

青年期は、幼少期からずっと情緒的に繋がっていた母親や父親から切り離そうと、これまでの土台としていた価値観を崩し、自分自身を作っていく、いわば自己確立の時期である。そしてこの課題達成のためには、退行することが必要とされており、この退行を通じて幼児期の外傷、葛藤、固着を修復・おさらいをし、新しい対人関係の構造を作り上げる事でその課題が成し遂げられるのである<sup>8)</sup>。子ども時代のさまざまな出来事や体験を思い出してはそれなりの結論を出し、新しく自分の考え方、生き方、価値観を吟味し、さまざまな経験をしながら自己の独自性を確認する作業をしていくことになるといえる。

交流分析の自我状態モデルにおけるPをこれまでの土台・価値観とし、Cを自己確立のために必要な退行と考え、Aを自己確立の状態と考えた。実際PR、CD、BSはAにPからの汚染が見られ、PR、CDはAにCからの汚染が見られる。PとC両方からの汚染はPのこれまでの価値観とCの自己中心的な部分との板ばさみが伺える。このイメージはまさに、第2次分離個体化過程であると考えられる。その過程において、PRはCから反発するという様相を取ることで、CDはその葛藤状態から引きこもることで安定を図ろうとする適応と考えられる。そしてBSはAにPからの汚染があり、Cは除外されていると考えられている。しかし、発達課題の達成には、Cの要素を必要とする。締め出されたものを戻す際に生じる怖さ、恐れが気持ち強く出てくると考えられる。そのためBSはまわりを常に警戒し、驚かされないために、緻密にものを考えることで身を固めるのである。以上のことから、PR、CD、BSは第2の分離個体化過程を如実に示している適応パターンであることが示唆される。



また、関連が見られなかったCM、RW、EOはそれぞれ一方からの汚染が見られるものの、もう一方とは適度な自我状態が保たれており、さほど葛藤が強く出ない適応傾向と考えられる。

今回、強迫パーソナリティに影響が示唆されたPR、CD、BSは親からの独立を目指すゆえの反抗心を持ちつつ（PR）も、精力性や競争心に乏しく、徹底的に頑張るよりは負ける前に引き下がる（CD）。そして周りに常に警戒し、脆弱な自己愛を守るための統制にエネルギーを費やしている（BS）と、成田の言う「弱力型強迫性格」に類似したものと考えられる<sup>7)</sup>。

## V. まとめ

本研究では、高校生の強迫パーソナリティ傾向をDSMの強迫パーソナリティ障害の診断基準に準じて作成されたOPTSを用いて測定し、人格適応論に基づいて6つの人格適応タイプの程度を測定できるJPAQとの関連を検討した。その結果、強迫パーソナリティ傾向はPRとCD、BS、RWと弱い相関が見られた。また、重回帰分析の結果、PRとCD、BSが強迫パーソナリティ傾向に影響を与えていることが明らかとなった。

これらの結果を人格適応論の自我状態モデルを手がかりに考察した際、PRとCDにはPとCからの汚染が見られ、BSにはPからの汚染とCの除外が見られた。青年期は第二の分離個体化の過程にあり、これまでの親の価値観と自分自身との欲求との折り合いを見つけ出す時期でもある。強迫パーソナリティ傾向に影響を与えていた3つの自我状態モデルはその折り合いをつけるための葛藤状態を表しているものだと考えられる。また影響力があった3つの適応タイプは、成田のいう「弱力型強迫性格」に類似していると考えられる。

## 課題と今後の展望

今回は調査対象校が限定されており、横断的側面のみを測定している。複数の高校の多様な高校生について、対象を拡大し、さらに検討必要がある。また、高校生の強迫パーソナリティ傾向の様相を知ることではきたものの、他の発達段階期の強迫パーソナリティ傾向については、また異なった発現様相の可能性もある。したがって、今後は、さらに大学生、成人など他の年代についても視野を広げ、さら

に検討していくことが必要である。

## 謝辞

本研究にご協力を頂いた調査協力校の先生方、回答者の生徒の皆さまには心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 米国精神医学会（2003）：『DSM-4-TR精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版』（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸）、医学書院、691～695
- 2) 井出正明・細羽竜也・西村良二・生和秀敏（1995）：強迫傾向尺度構成の試み、『広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編』第21巻、171～182
- 3) 岩崎徹也（1991）：青年期の強迫をめぐって－精神分析の立場から－、『思春期青年期精神医学』1(2)、128～137
- 4) Len, Sperry. (2012)：『パーソナリティ障害：診断と治療ハンドブック』（近藤喬一・増茂尚志）、金剛出版、203～225
- 5) 村松公美子（1996）：アレキシサイミアと強迫性格－計量精神医学的研究、『精神医学』
- 6) 中島香澄（2003）：現代学生にみられる強迫的心性と青年期発達課題（大人になること）への意識、『こころの健康』18(1)、60～68
- 7) 成田善弘（1981）：強迫神経症とその周辺、清水将之（編）『青年期の精神科臨床』金剛出版、64～82
- 8) 小倉清（1996）：『子どものこころ その成り立ちをたどる』、慶應義塾大学出版
- 9) Salzman L. (1985)：『強迫パーソナリティ』（成田義弘・笠原嘉）、みすず書房
- 10) 関山徹（2008）：高校生における強迫性格と精神的健康『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』18、163～173
- 11) 竹林奈奈（2002）：青年期における強迫的心性に関する一考察－衝動性とコントロールの力動と言う観点から－ 京都大学大学院教育学研究科紀要48号 p236-248
- 12) Vann Joines・Ian Stewart（2007）：『交流分析による人格適応論』（白井幸子・繁田千恵）、誠信書房
- 13) 山本晃（2010）：『青年期のこころの発達 プロセスの青年期論とその展開』、星和書店
- 14) 吉田洋美・吉田卓史・多賀千明（2000）：強迫性格傾向と両親の養育態度の関連について－看護学生に対するPBIとMOCIの施行結果から－、『心身医学』40(3)、263